

「流れのほとりに植えられた木」

詩篇 1 : 3

February.16.2025

詩篇 1 : 3 (パワポ)

Preface

元旦礼拝から 5 回に渡って主題聖句の御言葉を分かち合っていました、6 回目の今日で最後にしたいと思っております。

詩篇 1 篇は、聖書 66 巻の内容を要約しているとも言われるような御言葉ですので、この御言葉自体が持つ豊かさは掘れば掘るほどに泉となって水が湧き出るかのようだと思いますが、一先ず今日までにして、エペソ書に戻り、または他の聖書箇所から、この詩篇 1 篇が語ろうとしている大切なメッセージを今後も分かち合っていければなあと思っております。

今朝、主題聖句の御言葉に聞く最後に取り上げたいと思いますのは、「流れのほとりに植えられた木」についてです。

Part One

これまで見てきましたように、詩篇 1 篇では、三位一体の神さまのとの関係の中で人生が生まれ、神の言葉によっていのちを培われている人を幸いな人、正しい者と言っています。

またそのような人のことを、「流れのほとりに植えられた木」と例えています。

「流れのほとりに植えられた木」というこの例えとにらめっこしながら、この木のことをよ〜く考えてみますと、一つ大きな特徴があることに気付かされました。

それは、「植えられた」ということです。

皆さん、普通、木と言いますと、森や林や山などに自生した木を思い浮かべるでしょうか、または、植林された木を思い浮かべるでしょうか。

私は、漠然と「木」と言いますと、森や林などに自生している自然の木を思い浮かべます。

なので、この詩篇 1 篇の「流れのほとりに植えられた木」も、御言葉を読み流した時には、水のほとりに、またはマングローブのようにその根が水に浸かっている自然に生えている木を思い浮かべました。

ところが、よく見てみますと、「植えられた木」と、しかも、「流れのほとりに」と場所まで指定して、意図して植え付けられた木であり、意図をもって、どこからか移して来て、その木を植えた人がいるという木なんだということに気付かされます。

この「植えられた」という表現は、よく考えてみますと、聖書全体が語っている核心的な内容と一致することに気付かされます。

そして、その核心的な内容を、詩篇 1 篇の著者であるダビデが、情景豊かな分かりやす

い例えを用いて表現しているということに気付かされます。

この木は、自らの思いや力でそこに植わったのではなく、自分以外の他の誰かが、目的をもって、意図してそこに植えたということです。

正にこれこそ、聖書の語る福音だと思います。

主イエス様を信じて神を知るキリスト者となること、詩篇1篇の言う幸いな人・正しい者になるというのは、自然にそうなるのではなく、努力してそうなるのでもなく、そうしようとしたお方、天地万物をお造りになられた愛なる神が、愛する神のひとり子主イエス・キリストにあって、主イエス様を通してなされた神の救いの御業なんだということです。

聖霊なる神が、一人一人にふさわしく、その人独自のプランをもって、流れのほitoriという良いところに植え付けたということです。

それが、私たちに起こったことであり、これから起こっていく方々が、まだまだ沢山いらっしゃるといことです。

ヨハネの福音書3：16（パワポ）

オリンピックや世界的なスポーツイベントに出場する選手たちによっても、掲げられたりする有名な聖書箇所だと思います。

この御言葉は、「主イエス様を信じる者は、誰でも、靱殻の状態に残っていることはなく、流れのほitoriに植えられた木となることが出来る」と言います。

でも、「植える・植え付けるという行為は、神がなされる」と言うのです。

聖書は、人の活動を記録した本ではなく、神がなされたことを記録した書物です。

神を探し求め、あちらこちらに迷い道している人の努力を記録した本ではなく、それとは、真逆の事実を記録した書物です。

人はそれぞれ、自分の目に適った、自分の目に良いと思えることを行い、迷った道に進んでいるところ、神が、その後ろを追いかけて行かれます。

最初に人が、エデンの園で罪犯し戸惑っていた時も、神自ら、神の方からエデンの園に下りて行かれたように、神さまは、それ以降もずっと、常に、先に下りて行かれ、ついて行かれ、追って行かれました。

そしてついに、神のひとり子、主イエス・キリストにあって、最も尊いかたちで下りて来られ、失われた存在となってしまった人類一人一人を追って行かれました。

どこまで下りて来られ、追って行かれたのかと言いますと、ルカの福音書を見てみましょうか。

ルカの福音書15：3－10（パワポ）

私たちの努力や善行や志しによって、「流れのほitoriに植えられた木」のような幸いな人、正しい者、キリスト者となるのではなく、神が主イエスのうちにあって、道に迷った羊を、失われてしまった銀貨を探し出すまで追いかけて行き、どこまで行かれたのかと言いますと、カルバリ山の十字架に架けられ、死ぬるまで追いかけて行かれました。

風に吹き飛ばされた籾殻のような一匹の羊を追い、失われて暗い闇の中を彷徨ただじつとするしかないドラクマ銀貨を探し求めて、探し当てたならば、例え死が伴おうとも、流れのほとりに植え付けるまで追って行かれました。

籾殻であること、道に迷った羊、失われた銀貨であることも分からないでいた者のために、死に至るまで犠牲を払われ、私たちに対するそのご愛を明らかにして下さいました。

私たちを幸いな人へと、正しい者へと、流れのほとりに植えられた木へと、まことの神の愛を知るキリスト者へと変えなされること、これが、「植える」という神のわざであり、「植えられた」という恵みが私たちに起こったということです。

イエス・キリストが「流れのほとり」であり、イエス・キリストに繋がる繋げられることが、「流れのほとりに植えられた」ということです。

Part Two

ですので、この世にあつて、誰一人として、キリスト者として生まれて来る人はいません。

どこで生まれようが、キリスト教国家と言われる国で生まれようが生まれまいが、母親が父親がクリスチャンであろうがあるまいが、関係なしに、誰をもクリスチャンとして生まれては来ません。

クリスチャンホーム生まれで、クリスチャンホーム育ちだということで、その人が生まれながらのキリスト者であるということは、全くもってないですね。

聖書が言っている通りです。

先週見ましたローマ書3章には、「義人はいない、一人もいない。神を求める者はいない。すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった」とある通りです。

エペソ書2章でも、「自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、生まれながら、神の御怒りを受けて当然の者だ」と言います。

詩篇1篇を詠いましたダビデは、詩篇51篇で、「私は咎あるものとして生まれて来ただけでなく、罪ある者として、母は私を身ごもりました」とまで告白します。

自然に生えている木が、時と共に成長していくように、人も成長して行くと同時に、自然と、聖書の教える正しい者となり、幸いな人となり、神を知るキリスト者となっていくわけではありません。

植え付けられなければなりません。

永遠の栄光の座より、ひとり子イエス様をこの地に送るために、おとめマリアを愛情をもってお用いになって、イエス様がお生まれになるようになされたその神の御業が、私たちをキリスト者へと造りかえます。

私たちの努力や正しさや正義ではなく、神がひとり子イエス様をこの地にお送りになったという事実が、「植える」という神のお働きの核となり、手段となります。

誰でもいいわけではありません。

例え同じようにアダムを造り、この地に送ったとしても、そのアダムも同じように罪を犯し、私たちの身代わりにはなれないでしょう。

明確な意図と意志をもって、唯一完全無欠な生(人生)を生き、神の律法が要求するす

べてに従い、守ることのお出来になった、唯一聖なる罪なきお方であるイエス様だからこそ、カルバリ山の十字架の死が、私たちの身代わりに成りえ、生まれながらのどうしようもない罪人である私たちを、神という流れのほitoriなるお方に植え付け、キリスト者とするのが唯一お出来になります。

この方以外の方法で、私たち人間が、正しいとか、敬虔であるとか、靱殻でない義なる存在であるということにはなれません。

第二コリント5：21（パウロ）

とある通りです。

罪が無いわけですから、死なれる必要がないにも関わらず、敢えて、人を、流れのほitoriに植えられた木とするために死なれたイエス様は、ただ死なれただけでなく、神の御力によって死人のうちよりよみがえり、死と地獄とを完全に征服され、無力化し、死という永遠の病をズタズタに引き裂きさかれました。

そうして、死よりよみがえられ天に上げられ、父なる神の右に座すようになられてから50日目のペンテコステの日にイエス様は、約束の聖霊様をお送り下さり、人のうちに降臨されることをもって、主イエスに繋がるという、流れのほitoriに植えられるという御業を成され、その方を信じ、また信じる者にはすべての良い結果、神の裁きの前であって滅びない、「神であるわたしはあなたを知っている」という道をもたらしして下さいました。

そのペンテコステの日に、使徒ペテロが説教した時には、人々が心刺され、イエス様の弟子たちに向かって、「兄弟たち、私たちはどうしたらいいのでしょうか？」と尋ねたところ、ペテロは、「それぞれ罪を赦して頂くために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、プレゼントとして聖霊を受けます」と答えました。

「聖霊を受ける」ということをもって、神が私たちに植わって下さるということです。

さらに続けてペテロが、「この曲がった時代から救われなさい」と勧めたところ、3000人もの方々がキリスト者となっていきました。

人を、キリスト者とするのは神です。

三位一体の神は、罪、または曲がった時代という風に吹き飛ばされ無くなる靱殻から、イエス・キリストという流れのほitoriなるお方に植え付けるために、永遠に栄える木として下さいました。

こういうわけで、もし人がキリスト者とされたならば、その人には何一つ誇れるようなものはないでしょう。

なぜならば、そのすべてを神がなされたからです。

使徒パウロが、「神の恵みによって、私は、今の私になりました」（第一コリント15：10）と告白する通りです。

恵みとは、受けるに全くもって値しないにも関わらず頂くこと、それを恵みと言います。

神さまが全てをなさり、人のたましいに劇的変化を、あり得ない恵みを起こされました。そして今も、穀殻である人々のたましいにことを起こそうと、流れのほとりに植えようと働いておられます。

イエス・キリストにあって、私たち人間は、流れのほとりに植えられた木となります。植えるという神の大変な御業と、植え付けられるという実感の伴った霊的体験を通して、私たちはキリスト者とされます。

Part Three

前々回の説教の中でもお話ししましたが、キリスト者になるというのは、既存の私たちの姿や私たちがすでに所有している身に付けている状態に、何かを付け加えるということではありません。

神を知るキリスト者となるというのは、主なる神様が、私たちを全くもって新しい存在としてお造りになるということです。

私たちのうちに新しいいのちを吹き入れ、私たちのうちに、それまでの生き方や見ていたものとは全く違うと言っていいほどの、新しい原理、法則、見地を植え付けるということでしょう。

キリスト者とは、ごみとして捨てられるいのち無き穀殻から、いのちある流れのほとり植えられた木に造りかえられた者たちですね。

このことを、聖霊なる神様が私たちのうちに住まう、住まわれるということをもって成して行かれます。

聖霊なる神が、私たちのうちに入り、植え付けられ、お住まい下さる、それまで覚えたことのなかった葛藤、戦い、苦しみが生じ始めるでしょう。

それまでは、時と場合によって、感情と気分によって、人の目と社会の目によって、自分の信念と養われた経験や教養によって、ころころ変わった罪意識における葛藤、戦い、苦しみが生じます。

でも、この葛藤、戦い、苦しみは、苦みをもって、空しさをもって終わるものではなく、神の報い、あわれみ、赦し、喜び、感謝、そして、自分を赦し愛す、他者を赦し愛すというところへと導かれて行くように思います。

時が来ると、そんな実を結ぶようにされるでしょう。

詩篇 32 : 1-7, 10-11 (パウロ)

正しい者、幸いな人、神を知るキリスト者と造りかえられたならば、4節にありますように、「神の御手が私の上に重くのしかかり」、自分の罪な姿を示されるでしょうが、葛藤しながら、戦いながらも、結局は降参し、ひれ伏し、齒向かわずに、「私の背きを主に告白しよう」と罪と咎を告白するならば、赦して下さり、守って下さり、恵みはその人を取り囲み、喜び、楽しむところへと導かれて行くことでしょう。

人に対して「ごめんね」、神に対して「ごめんなさい」というその一言を私たちの口から出させることによって、私たちを赦し、神自ら隠れ場となって下さいます。

皆さんの中に、木を植えかえるという作業をなさったことのある方もいらっしゃると思いますが、大変な作業ですね。

大きい木であるならば、ユンボなどの重機が必要になって来るでしょうし、人でも必要です。

腰を痛めてしまい兼ねない重労働も伴います。

まず、植えかえようとしている木の周りを掘り起こさなければなりません。

木にとっては試練の時だと思います。

それなりに、そこに落ちていたところから、もっと良いところだとは言え、掘り起こされるわけですから。

そして、掘り起こした木を植えるために、植えかえる側の地面を今度は掘り起こして、それから木を植えます。

植えたら、木が倒れないように土をかけ、その上を固く地固めをしてあげなくてはなりません。

これと同じように、私たちがキリスト者となる、キリスト者として生きて行く過程も、実のところ、そんなに簡単なことではないように思います。

聖霊なる神様が、イエス・キリストにあつて、私たちのうちに植え付けられる時に、またそこに従って生きようとする時、それまでなかったようなことが起こることがあるでしょう。

それまで当たり前のようにして来たことに対する罪悪感が突如として生じたり、人から反対や妨げにあつたり、ヨブのようにサタンの与える苦難を通らされて、神を信じることを辞めようという霊的戦いの現場に投げ入れられたりと、木を植えかえるかのような大変なところを通ることがあるように思います。

でも、詩篇1篇の御言葉は約束します。

「時が来ると実を結び、その葉は枯れず、そのなすことはすべて栄える」とですね。

そして、この事実を毎日、私たちがい思い起こさせて下さるのが、神の霊そのものであり、いのちである、日々食す聖書の御言葉ですね。

Part Five

私自身、この詩篇1篇の御言葉をここ2ヶ月程思い巡らしながら過ごしているのですが、「時が来ると実を結ぶ」という3節の御言葉が、体の中心から湧き上がってくるような感動とともに、思わず涙がブワッと出て来て、嗚咽しながら「主よ」と口に出してしまうほどに迫って来る話に出会いました。

21年前に出版された、「チソン、愛してるよ」という日韓合わせて50万部以上売れベストセラーになった本をご存知でしょうか？

その著者のイ・チソンさんがご経験された壮絶な事故を、日本のテレビ番組が再現VTRにして放映されたりすることもありました。

以前めぐみ教会の青年たちと一緒に、チソンさんの講演を聞きに、東京の淀橋教会に行ったこともあります。

イ・チソンさんという方は、今から25年程前に、乗っておられた車を飲酒運転していた車に追突されて、ガソリンに引火し、その火がご自身の体にまで及び、火だるまになっているところを実のお兄さんに助け出されましたのですが、当時幼児教育を学んでいたチソンにとって、それ以上傷つく言葉はないだろうと思われる言葉、「化け物」と子どもから言われてしまうような大やけどを全身55%以上に負ってしまいました。

生きておられるだけでも奇跡のような大事故に合わせ、人生が一変してしまいました。

その壮絶な体験を、彼女はクリスチャンでしたので、イエス様を信じる信仰を土台にして書き上げた本が、「チソン、愛してるよ」という本です。

その詳しい内容は今日は控えたいと思うのですが、先週、20年近くぶりに、このイ・チソンさんの現在の動向について知る機会がありました。

私がアメリカにいる時お世話になり、今も毎週、ご自身がお書きになったエッセイを送って下さる私にとってメンターのような先生がいらっしゃるのですが、その先生がつい最近、このイ・チソンさんと対談をしたユーチューブ番組を私のメールに送って下さったのです。

で、その番組を通して知った、現在のチソンさんの姿に、「時が来ると実を結び」という御言葉が、私の中で、バシッと重ね合わさってしまいました。

今でも、火傷で突っ張る皮膚を直すために、「地獄のようだった」とご本人が仰るような手術を含めて、これまで50回以上の手術を受けて来られながら、イエス様とともに、流れのほとりに植えられた木として生きて来たお証が、その映像の中にありました。

23年前に、負ってしまった大やけどのために当時通っておられた大学をお辞めになられたのですが、それから23年後、神の恵みにより、そのお辞めになられた母校の大学の先生として戻って来られ、今は、その大学の教壇に立って、学生たちに障がい者福祉について教えておられると言うのです。

不慮の事故により全身にやけどを負って、障がい者として生きて行くことになり、自分という存在が一人でも多くの方々に慰めとなり、力となり、イエス様の愛を示すことになると、教会などからの支援を受けて、アメリカの大学でその間、学びをされたそうです。

二つの修士号を取得され、UCLAで障がい者福祉の領域で博士号を取得され、23年ぶりに、辞めたくなくても辞めなければならなかった母校の大学に先生として帰って来られました。

そして、その授業は、ご自身障がい者として社会で生きておられるので、学生たちが、「先生の話はご自身の話で、実感が伴っているので、良く分かるし、とても勉強になります」と言ってくれるんです。

チソンさんは、「流れのほとりに植えられる」という大きな試練であると同時に、主にあって生き直すという大きなチャンスであったところを通られ、正に、天の御国における究極的な実のみならず、この地上の人生という歩みにおいても、神がなさったとしか言いようがない実を、時が来て実らせ、その実りをもって慰められ、励まされ、主の御手をほめたたえ、自らを喜び、人を楽しませておられるチソンさんのそのお姿に、詩篇1篇の御言葉が重なり合って、打ちのめされました。

そして、「神様は何てことをなさりながら、愛する者を導かれるのだろうか」と、その計り知れない、言い表しようのない御業を覚え、私自身の人生においても、将来を見据え、再度、期待することが出来ました。

Conclusion

キリストの内に植えられ、キリストゆえに生き、キリストを食しながら、キリストという泉から湧き出る水を飲みながら、キリストの息遣いに生きることが、生きる理由である者たちにとっては、「生きることもキリスト、死ぬこともまた益です」というとこしえの実りを期待しつつ、約束されていると同時に、

今生きているこの人生という営みにおいても、時に適って、実りを味わわせて頂けることでしょう。

なぜならば、キリストを生きる者たちのいのちは、人のいのちではなく、神のいのちであり、「その葉は枯れない」かのようないのちだからですね。

そうして実際に、日々、そのいのちを味わわせて頂きながら、この礼拝の場へと導き出されていることを信じます。

イエス・キリスト以外のところから満足を得ようとしていた籾殻のようなところから、キリストがすべて、キリストおひと方で満足というところへと受け付けるために、聖霊様は、私たちのうちでその御業を成して下さっていることを信じます。

ならば私たちも、その御業に応えることを諦めない者でありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：詩篇1：3